

# 保育者養成課程における授業プログラムの協働： 学修ポートフォリオを活用して

## Collaboration of Class Program in Childcare Worker Training Course : Using the Learning Portfolio

キーワード：保育内容、 指導法、 領域、 アクティブラーニング  
Keywords: Childcare Content, Teaching Method, Area, Active Learning

村石 理恵子

土井 晶子

MURASHI Rieko

DOI Akiko

### 1 研究の背景

保育は多面的総合的なものであり、保育実践者は環境を通して子どもが経験することを支援していく。保育者養成課程においては、学生が保育の総合性を理解し環境を構成する力を醸成していく方策を検討し、特に短期大学では2年間の養成のプロセスをいかに有機的に組織するかが重要である。

佐藤は『教育の方法<sup>1)</sup>』の中で、「子どもの側からみると、授業の過程は教材と対話し、仲間と対話し、自分自身と対話しながら教育内容を理解し習得する過程」であると述べている。授業者は授業後の省察で学修者が学んでいる事柄の意味の関わりを組織していくのである。

学修ポートフォリオ<sup>2)</sup>を導入すると、継続的かつ定期的に学びを振り返ることを通じて学修の到達度を確認し、取り組むべき課題を発見しやすくなる。また、教員から個別指導を受けることで適切な学修支援を獲得して学びを深化させ、さまざまな知識と技能を自主的に修得することができるようになる。このような学

修の体験を繰り返すことで、生涯に亘り身につけるべきキャリア「能力」を形成することができる。「学生自身の自己省察を可能とすることにより、自律的な学修をより深化させる<sup>3)</sup>」ためには、何を学んだのかというコンテンツ・ベースから、学習過程を振り返ることが重要である。知識の習得だけでなく、知識を使う能力（思考力やコミュニケーション能力など）を育てる意識が重要になる。

これまでに履修生の「学び」の可視化と科目の専門性に関する共通理解を促す点から、ポートフォリオを活用した授業研究<sup>4) 5) 6)</sup>は行われ、学生の学びの有効性は明らかになっているが、保育者養成課程の授業で、多角的にポートフォリオを活用した授業研究は行われていない。

以上のような学修を、保育者養成課程での2年間で実施するには、教員がカリキュラムポリシーを共有し、連携、修正を図りながら、各授業が行われることが重要になってくる。さらに、学びと教育のプロセスを「可視化」し、そのプロセスを学生と担当者間で共有することで、学生の学修行動を把握できるようにする

ことが重要である。保育者養成課程における教育の質的転換に向けて、保育内容の指導法を授業者は、学生が学修の振り返りを通じて、自主的に学修に向き合えるように、協働して学修ポートフォリオを導入する。

## II 研究の意義と目的

### 1 研究の意義

学修ポートフォリオについて、その導入の成果を明らかにする本研究は、その過程において当事者である学生と授業者にとっての学修の達成が図られるだけでなく、学生が自ら課題を発見し、学びを深化させるようなポートフォリオを活用した授業の浸透の一助となる。

### 2 研究の目的

本研究の目的は、保育内容の指導法を担当する授業者が協働して、学修者が対話的に学ぶ保育者養成教育を実践するための授業プログラムの構築を目指すことである。具体的には、保育内容指導法の授業プログラムを授業者が協働で検討し、ポートフォリオを活用した学修者の学びを可視化し、明確にすることである。

### 3 ポートフォリオを活用した学修

毎回の授業で図1のように、①授業毎のシラバス、②ノート(記録)、③(必要に応じて配布した)資料、④振り返りシート、⑤提出課題、⑥その他(成果など)を授業毎にインデックスを付けてファイルし、それを学修ポートフォリオとした。15回の授業で集められたものが一冊のファイルに綴られて学修ポートフォリオとなる。<sup>7)</sup>

また、15コマ目の授業で、この学修ポートフォリオ(14回分の①～⑥が綴られているもの)を用いて、学生自身が授業の到達目標に基づき、授業で何を学んだのか、その学修をどのように生かしていくかについて、これまでの授業の振り返りを行い、全体振り返

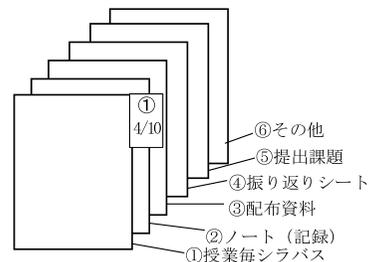


図1 保育内容指導法ポートフォリオ

り記録を作成する。15コマ目の授業終了時に、全体振り返り記録と学修ポートフォリオを提出する。この15コマ目の授業では、学修ポートフォリオを用いて、授業の振り返りを行う。そして、授業の最後に、学生が授業の学修の振り返りと今後の学修に一言ずつ発表する。提出された全体振り返り記録と学修ポートフォリオは添削し、学生へ返却する。

学生は、授業毎にポートフォリオを活用しながら受講し15回でその領域の学びがあり、2年間で5領域合計75回の授業を履修する。さらにその間に実習が入ることによって、より具体的な子どもの姿や、保育内容の総合性の理解が深まっていくことが予測される。また、担当者間では、各回の授業で、ねらいと到達目標を明確にし、互いの授業の把握を行う。

### 4 保育内容指導法の授業の流れと概要

#### (1) 全体の俯瞰

保育内容の指導法の開講時期は表1のとおりである。5領域それぞれ15回の授業を計画している。

#### (2) 節目の予測

保育内容指導法の授業全体の確認をし、表2のとおり、節目の予測の共通理解を図る。

この節目の予測に基づき、具体的な到達目標を立て、担当者間の共通理解を図る。

表1 「保育内容の指導法」の開講時期<sup>9)</sup>

1年次前期	1年次後期	2年次前期	1年次後期
健康、言葉 「保育内容総論」	人間関係、環境 「音楽表現」	表現 「造形表現」	(保育・教育課程論)

注1 「 」は、5領域に関連する科目で、筆者以外が担当した科目

注2 ( )は、筆者が担当し、最後に5領域のまとめの解説をした科目

表2 節目の予測<sup>10)</sup>

時期	予想する学生の姿
1年 開始時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子ども理解、保育理解への意欲を持っている。保育への期待、保育実践者像を自分なりに持っている。</li> <li>・保育内容は、乳児、1歳から3歳未満児、3歳以上児に対して、単独でなく他領域と重複している総合的な活動が行われることを理解している。基礎知識があり、子ども理解、保育理解への意欲を持っている。保育実践者像を1年次よりも具体的に持ち、次の実習に活かそうとする。</li> <li>・子どもの姿の予測をしながら保育内容を捉えようとする。保育内容を総合的に構想しようとする。保育実践者としての資質・能力を自覚し、自己課題を持ち続ける意志をもっている。</li> </ul>
2年 開始時	
↓ 2年 終了時	

### (3) 複数領域と共有しやすい視点・教材

本研究の対象養成課程のある大学の特色を活かした身体的活動を複数領域で共有視点・教材として用いる。また、各科目の履修時期も踏まえ、どのような視点、教材が適当かを見出していく。

課程」の授業については、次のとおり実施している。  
(1年次前期)

「保育内容(健康)指導法」(演習、必修1単位)

「保育内容(言葉)指導法」(演習、必修1単位)

(1年次後期)

「保育内容(環境)指導法」(演習、必修1単位)

「保育内容(人間関係)指導法」(演習、必修1単位)

(2年前期)

「保育内容(表現)指導法」(演習、必修1単位)

(2年後期)

「保育・教育課程論」(講義、必修2単位)

## III 研究の方法

### 1 研究の概要

#### (1) 研究対象

保育者養成校のA短期大学児童教育学科で、研究者が担当している授業とその授業を履修している学生である。

担当科目:「保育内容指導法」授業(5科目)、

「保育・教育課程」

履修学生:平成29年度前期 70名

平成29年度後期 64名

平成30年度前期 61名

平成30年度後期 60名

また、「保育内容指導(5科目)」及び「保育・教育

#### (2) 期間

実施は、平成29年度入学生の短期大学での2年間の養成期間とする。

授業期間:平成29年4月~平成31年2月

#### (3) 研究の展開

本研究では、アクション・リサーチの研究方法を採用する。研究全体の構成は、保育者養成校での保育内容指導の授業プログラムを計画し実践する。

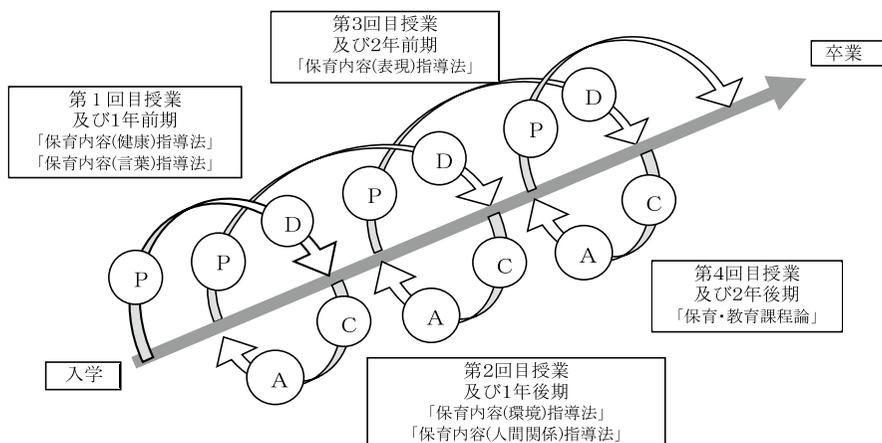
毎回の授業省察を経て、そのアクション・リサーチへ移行する。授業内容を改善し、次回の授業を行う。これを2年間養成課程において繰り返す。

具体的なアクション・リサーチの方法としては、「研究の問い」「計画」「実行」「分析と評価」「修正と次の計画へ」のように螺旋型サイクルの展開で、継続的に授業改善を行っていく。

実際の研究手続きについては、毎回の授業実践では、学生が履修すべき内容を「到達目標」として明に設定し、授業者の実践を「試行」として教授し、学修の定着を「課題」として図る。また、毎回の授業で行う振り返りシートはその日の授業内に、課題は2日後に提出させ、翌週の授業までにコメントを添えて返却する。そして、授業を省察し、アクションの方向性を決め、さらに次の授業のサイクルに入ることを通して学修の定着を図る。このように、PDCAサイクルの手法を用いて、継続的に授業改善を行っていく。また、2年間全体においては継続的螺旋型にPDCAサイクルを用いて、授業を実施し学期毎に授業省察を行い、次の学期に改善し授業を実施する。このプロセスをチャートにしたものが、研究の概念図(図2)である。

## 2 研究の手続き

### (1) アクション・リサーチ(授業実施)



\* 授業は、第1回目～第15回目までである。

図2 研究の概念図

授業者が授業毎の到達目標を明確にし、互いの進行状況を共有しながら、1年次前期に「保育内容(健康)指導法」と「保育内容(言葉)指導法」の授業を実施する。また、前期の科目の省察を行い、1年次後期に「保育内容(環境)指導法」及び「保育内容(人間関係)指導法」を前期同様に互いの進行状況を共有しながら実施する。更に、授業省察を行い、2年次前期「保育内容(表現)指導法」を実施する。5領域全ての科目が終わった2年次後期に「保育・教育課程論」で保育内容の学生の振り返りを行う。

### (2) 分析

「保育内容(健康)指導法」及び「保育内容(言葉)指導法」、「保育内容(環境)指導法」、「保育内容(人間関係)指導法」、「保育内容(表現)指導法」の授業のポートフォリオ及び学生自身による振り返りを基に、学生の学修状況等を分析する。

具体的には、授業実践とその省察を、その日の授業のねらいや仮説と、学生が提出した振り返りシートや課題と照らし合わせ、学生の理解度を分析する。さらに、こうした分析を踏まえ、学期毎に保育内容指導の研究対象授業全体の検証(省察)を全体振り返りシートに基づき行う。

- 1) 授業のねらいと到達目標: 各授業の到達目標に基づき、学生の自己評価(4段階)

2) 節目の予測： 授業終了後の自己評価から学生の意識を振り返る。

3) 他領域と共有しやすい視点・教材： 本研究対象養成課程の特色を活かした身体的活動を用いた教材について振り返る。

最終的には、各科目の到達目標について、学生に対して認識を図る授業プログラムの構築を目指すものである。

### (3) 倫理的配慮

本研究の実施においては、研究対象授業初日に学生に研究の趣旨説明等を行い、研究への同意についての承諾を得る。また、特定の学生のデータを取り扱うときは匿名化を図り、データ結果の集計・分析を行う。研究倫理審査承認番号(研倫審平30-2号)

## III 結果及び考察

### 1 授業のねらいと到達目標

ねらいと到達目標を明確に設定し、授業を実施し、ポートフォリオを用いた授業の振り返りを行う。到達目標を「4 十分にできた」「3 できた」「2 あまりできなかった」「1 できなかった」の4段階の自己評価を行った。

表3 到達目標 保育内容(健康)指導法<sup>11)</sup>

<ol style="list-style-type: none"> <li>1 領域「健康」の指導に関する、幼児の心身の発達、基本的な生活習慣、安全な生活、運動発達などの専門的事項について理解し、説明することができる。</li> <li>2 領域「健康」のねらい及び内容並びに全体構造を理解している。</li> <li>3 生活習慣の形成と援助の仕方について理解し、援助・指導することができる。</li> <li>4 園での遊びについて理解を深め、模擬保育とその振り返りを通して、援助の仕方と保育を改善する視点を身に付けている。</li> <li>5 領域「健康」に関する具体的な保育を想定した指導案を作成することができる。</li> <li>6 領域「健康」における現代的課題や保育実践の動向を知り、保育構想の向上に取り組むことができる。</li> </ol>
--

### (1) 保育内容(健康)指導法

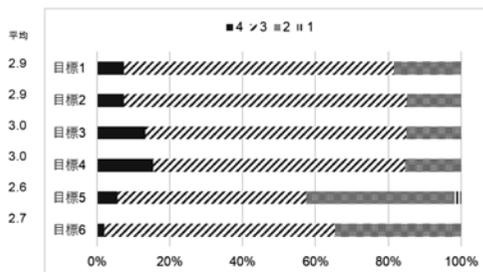


図3 「健康」到達目標に対する自己評価(4段階評価)<sup>12)</sup>

また、記述での振り返りでは、次のような内容があげられている。

表4 学生の振り返りコメント(一部抜粋)

<p>(健康)</p> <p>幼児の生活習慣や安全について、また子どもの発達状況に合わせた援助の仕方などを学びました。子どもたちは発達の状況によって生活リズムや出来ることが変わってくると思うので、それを理解していることで、いい保育をすることが出来るのではないかなと思いました。安全面を考慮しつつ、リスクとハザードを考えた保育をすることで子ども達の発達を促すことが出来ると思いました。どのくらいの時期にどのくらい発達するのかというのをしっかりと実習までに理解を深められたらいいなと思います。</p>
--

### (2) 保育内容(言葉)指導法

表5 到達目標 保育内容(言葉)指導法<sup>13)</sup>

<ol style="list-style-type: none"> <li>1 乳幼児期の言葉の発達を理解する。(言葉の機能を理解する。言葉の獲得の過程を理解する。)</li> <li>2 言葉を育てる保育内容や指導を理解する。</li> <li>3 領域「言葉」のねらい内容を理解する。</li> <li>4 家庭や保育の場、地域での環境づくりを知り、実践につなげようとする。</li> <li>5 部分的な指導計画の作成、模擬保育の実施とその振り返りを通して、保育を改善していこうとする。</li> <li>6 領域「言葉」における現代的課題や保育実践の動向を知り、保育構想の向上に取り組もうとする。</li> </ol>
--

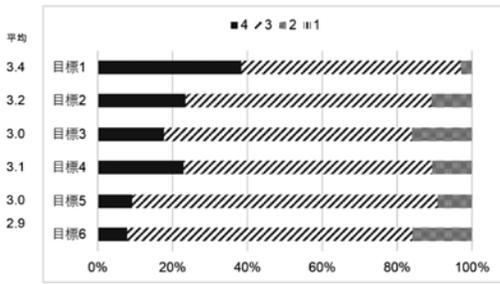


図4「言葉」到達目標に対する自己評価(4段階評価)<sup>14)</sup>

また、記述での振り返りでは、次のような内容があげられている。

表6 学生の振り返りコメント(一部抜粋)

(言葉)  
 言葉の発達の過程を理解できた。これを保育の現場でとっさに良い判断ができる材料にしたい。言葉を聞き取るフィールドワークをすることにより、今までと違って、子どもの言葉を意識して聞くことが出来た。生活や遊びの中で言葉が育っていくことを知った。話すことだけでなく言葉遊びの中でも言葉を覚えていくことを知った。子どもたちの言葉の獲得の様子を見るのが楽しいと思いました。言葉遊びや絵本の授業で学んだことを教育実習でも使ったり、自ら調べていきたいです。育てるための指導というのはまだ子どもにやったことではないので、実際にやることができたいと思う。乳幼児期の言葉の発達について、とてもおもしろいと感じたので早く保育施設にいきたい。保育士になった時に子ども達への言葉かけには特に熱心に取り組んでいきたい。授業で作ったポートフォリオを今後大切に保管してこれからの自分に役立てていきたい。

(3) 保育内容(環境)指導法

表7 到達目標 保育内容(言葉)指導法<sup>13)</sup>

- 1 領域「環境」の指導に関連する、幼児を取り巻く環境や、幼児と環境との関わりについての専門的事項における感性を 養い、説明することができる。
- 2 領域「環境」のねらい及び内容並びに全体構造を理解している。

- 3 乳幼児期の子どもを取り巻く環境とそれらとの関わり方と、小学校以降の教科等とのつながりを理解している。
- 4 子どもと環境との関わりを援助する保育実践のあり方を理解している。
- 5 領域「環境」における現代的課題や保育実践の動向を知り、保育構想の向上に取り組むことができる。

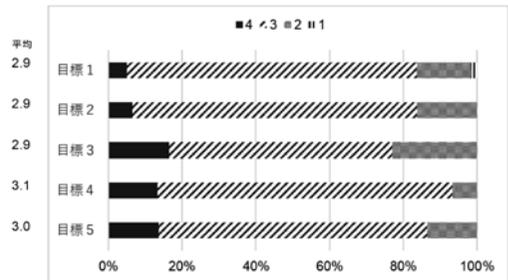


図5「環境」到達目標に対する自己評価(4段階評価)<sup>16)</sup>

また、記述での振り返りでは、次のような内容があげられている。

表8 学生の振り返りコメント(一部抜粋)

(環境)  
 子どもを取り巻く環境に対し、子どもたちはどのように見たり、その環境にはどのような意味があって、見通しをもった環境構成をしているのか等を見れるようになり、理解する事、視点を変えることができた。また、文字や数字についても、普段、私たちは当たり前のように使っているけれども、子どもに対して教える、使うには、正しいことを知らなくてはいけないと学んだ。指導案を書くことについて、保育者の援助はねらいを達成できる援助をまた、ワードの使い方が大切だということを学べた。

(4) 保育内容(人間関係)指導法

表9 到達目標 保育内容(人間関係)指導法<sup>17)</sup>

- 1 乳幼児期における人との関わりについて、子どもの発達の側面から理解する。
- 2 保育者として子どもとの関わりを考えていこうとする。
- 3 人との関わりを育てる保育内容、指導を考える。
- 4 領域「人間関係」のねらい内容を理解する。
- 5 部分的な指導計画の作成、模擬保育の実施とその振り返りを通して、保育を改善していこうとする。
- 6 領域「人間関係」における現代的課題や保育実践の動向を知り、保育構想の向上に取り組もうとする。

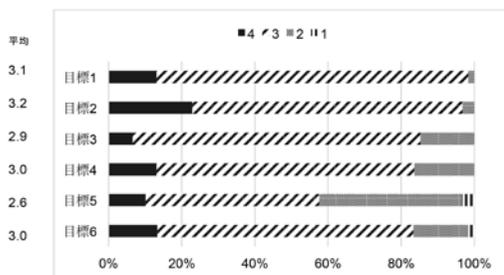


図6 「人間関係」到達目標に対する自己評価 (4段階評価)<sup>18)</sup>

また、記述での振り返りでは、次のような内容があげられている。

表10 学生の振り返りコメント (一部抜粋)

(人間関係)  
乳児期で保護者や保育者と愛着を形成することで幼児期では、友達と関わりにつながる事が分かった。課題などでも自分が保育士になったらどうするのかということを考える機会をたくさん与えてもらってどのような行動がよいかなどを学ぶことができた。人との関わりが大切だが、幼児期では、「環境を通しての教育」が必要となる。その中で、遊びのルールやリレーなどの色んな人と協力して行う遊び

を経験していく。ICT、IOTなど、私たちが保育者になる時に、大切になってくることを、知ることができた。

(5) 保育内容(表現)指導法

表11 到達目標 保育内容(表現)指導法<sup>19)</sup>

- 1 保育所保育指針・幼稚園教育要領に示された幼児教育の基本を踏まえ、領域「表現」のねらい及び内容を理解する。
  - 1) 保育所保育指針・幼稚園教育要領における幼児教育の基本、領域「表現」のねらい及び内容並びに全体構造を理解している。
  - 2) 領域「表現」のねらい及び内容を踏まえ、幼児が経験し身に付けていく内容と指導上の留意点を理解している。
  - 3) 幼児教育における評価の考え方を理解している。
  - 4) 領域「表現」において幼児が経験し身に付けていく内容の関連性及び小学校の教科等とのつながりを理解している。
- 2 乳幼児の発達や学びの過程を理解し、領域「表現」に関わる具体的な指導場面を想定した保育を構想する方法を身に付ける。
  - 1) 幼児の心情、認識、思考及び動き等を視野に入れた保育構想の重要性を理解している。
  - 2) 領域「表現」の特性及び幼児の体験との関連を考慮した情報機器及び教材の活用法を理解し、保育構想に活用することができる。
  - 3) 指導案の構造を理解し、具体的な保育を想定した指導案を作成することができる。
  - 4) 模擬保育とその振り返りを通して、保育を改善する視点を身に付けている。
  - 5) 領域「表現」の特性に応じた現代的課題や保育実践の動向を知り、保育構想の向上に取り組むことができる。

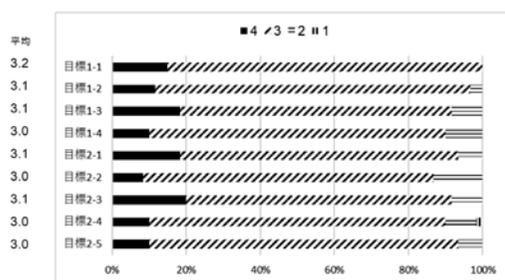


図7 「表現」到達目標に対する自己評価 (4段階評価)<sup>20)</sup>

また、記述での振り返りでは、次のような内容があげられている。

表12 学生の振り返りコメント (一部抜粋)

<p>(表現)</p> <p>「表現」では、音楽、身体による表現、造形に親しむことで豊かな感性と表現力を養う。感じたこと、考えたことを自分なりに表現する。保育者として子どもたちの興味や感動を引き出す環境を整えることが必要。子どもの気持ちを理解することは、信頼関係づくりにおいてだけでなく、表現する支えにもなる(内面の表現の理解)。幼児期には非認知能力をつけることが大切。子どもの行動の意味を分かってあげられるか、あげられないかは保育者次第で、そのためには、子どもが表現しやすい環境構成をすること、一人一人と向き合うことが大切。「表現」のねらい、内容を頭に入れることで、1つの活動も違う視点で見ることができる。今はゲームとか機会が多いが、身近な物で遊ぶ楽しさを知ることが大切。子ども主体の保育、子どもの表現を大切に、そこから保育をすすめていくこと、引き出すこと。大人の考えをおしつけてはいけない。</p>
---

1年前期科目「保育内容(健康)指導法」「保育内容(言葉)指導法」の授業の到達目標について、2科目共に、学生の自己評価は概ね達成した(8割)と捉えている。ただし、健康の到達目標5・6については「4十分にできた」「3できた」と回答したものは約6割に留まっている。到達目標の達成は、1年前期では模擬保育や現代的課題への意識は難しいと考えている

が、全体に自己評価が高いことは、1年前期終了時点での満足感があったためだと思われる。

1年後期科目「保育内容(環境)指導法」「保育内容(人間関係)指導法」の授業の到達目標について、2科目共に、学生の自己評価は概ね達成した(9割)と捉えている。ただし、人間関係の到達目標5については「4十分にできた」「3できた」と回答したものは約6割に留まっている。「指導計画の作成は難しい」と考えていることが理由だと推測される。

2年前期科目「保育内容(表現)指導法」の授業の到達目標について、学生の自己評価は概ね達成した(9割)と捉えている。

以上のことから、到達目標における自己評価は、5科目を通して概ね達成したと捉えられる。2年次前期終了後、9月中旬から保育実習、10月から後期授業が始まる。後期の授業の終わりに、保育内容全体の振り返りを行う。

## 2 節目の予測

記述での振り返りでは、それぞれの時期において、次のような内容があげられている。

### (1) 1年前期「保育内容(健康)指導法」「保育内容(言葉)指導法」

表13 学生の振り返りコメント (一部抜粋)

<p>(健康)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ホールで行った授業での実際に行ったことで分かった子どもの視点、そして、幼児体操の発表で感じた自分が思っている以上に体を多く全身を使ってやる。というのを学ぶことが身に染みてきたので、これからの実習で実践して生かしていきます。</li> <li>・ 子どもの心身の発達や、運動発達について専門的に学べたので、保育の現場に出たときに一人ひとり個人差があることを踏まえて子どもに合った保育ができようになりたいです。</li> <li>・ 来年の責任実習で指導案を作成する時に今回の指導案が役に立つと思ったし、ミスしてたところも改善して作成することができるかなと思いました。リスクとハザードでは保育士になった時に何がリス</li> </ul>
---

クで何がハザードとかも考えながら子ども達に援助ができるのではないかと思います。

- ・これから幼児園実習があるので、その時に子ども達の発達状況に合わせた援助ができればいいなと思います。

#### (言葉)

- ・場面場面での言葉の使い分けや子どもがどう思っているかなどに気を配りながら実習等を行っていただいたいと思います。
- ・学んだことを、頭の中だけでなく、実践に活かしていくというつながりを実習を通して、挑戦していく、常に改善、学び、改善をしていく。
- ・フィールドワークをやったことで、日常で乳幼児に会ったときに、子ども達が話をしているときの会話を聞き、今までよりも何を言いたいのかを理解できるようにになった。
- ・絵本をたくさん知ることができたから、今度は読み方を工夫したり、色々なジャンルの絵本を見たい。
- ・指導計画を習ったから、実習で活用させたい。
- ・ポートフォリオを残しておいて、ちゃんと保育士になる前、なっている時も見返せるようにする。
- ・授業では平均的な発達段階の学習をしてきたが、人それぞれ、男、女でまた少しずつ変わってくるので、実際に見ていくのもおもしろいなと思い、親戚の子ども達をこれから見ていきたいなと思いました。

教育実習が間近で、実習を自覚したコメントが多い。子どもを理解すること、子どもの発達に合わせることなど、実習で自分が行うことを想定するようになったと思われる。

### (2) 1年後期「保育内容(環境)指導法」「保育内容(人間関係)指導法」

表14 学生の振り返りコメント(一部抜粋)

#### (環境)

- ・授業で学んだ、このポートフォリオをもとに、まずは実習で実習前、実習中も活用して濃い実習をしていきたい。また、指導案含め、保育のときに、子どもにとって一番良い環境づくり、意味のある環境

を作っていけるように、この授業で学んだことをもとに行っていきたい。

- ・環境のかかわりなどを頭にいれながら、子どもの確かな環境構成をしていこうと思います。また、授業で学んだ指導案の書き方も保育の場で生かしていこうと思います。
- ・実習日誌に園の環境にどのように配慮があるのかを考え記入する。将来保育の環境の現場で働く際に、子どもの学びや生活のために環境づくりを行う。文字の練習をして正しい教科書体を書けるように練習をする。どんぐりを製作で使う時に処理をしっかりと、安全に配慮する。

#### (人間関係)

- ・2月、3月の実習を頑張るって自分に何が足りないかを学んでいこうと思う。乳児の頃の保育は特に愛着の形成が大切だと分かったので実習や就職したときに活かそうと思った。実習に行く前にもう一度事例を見直して、準備をしたい。
- ・学んだ関わり(人間関係)を活かして指導計画をつくったり、実習に活かしたい。
- ・2月にいく保育実習で子どもたちがどんな人間関係を築いているのか、授業で習ったことを実際に見てみたいと思っています。

1年次後期に実施した「環境」と「人間関係」では、1年次後期終了時の保育所実習に向けてのコメントが多く見受けられる。保育実習(1年次2・3月)を学修の節目にしている。

### (3) 2年次前期「保育内容(表現)指導法」

表15 学生の振り返りコメント(一部抜粋)

#### (表現)

- ・保育の現場に出たときに、子どもの自由な表現や、表現するまでの過程を大切に。また、内面の表現も読み取れるようにしたい。他の領域と関連づけながら、子どもは今どのようなことを学んでいるのかを考えて保育する。保育を改善していく姿勢を常に持つ。
- ・今回のこの授業で学んだ、「子ども主体」というのを大切に、

子どもの表現には意味があるので、その変化や、気持ちをくみとって子どもと関わっていきます。また、行事の際の出し物などは出来るだけ子どもの意見を大切にして、子どもと向き合う先生になりたいです。

- ・ 今後の実習などの活動を考える際に、子どもの視点で考え、工夫することなどのことを生かしていく。
- ・ 紙コップや新聞紙、ウレタン棒を使って色々考えたので、他の物でもこの授業を生かして子どもの表現を大切にしていきたいです。これからの実習で生かしていきたいです。

2年次前期に実施した「表現」では、卒業後の保育現場に向けての意欲が感じられるコメントが見られる。保育実習(2年次9月)、就職(卒業後)を学修の節目にしている。

以上のことから、節目について、振り返る。2年間全体として、保育内容を総合的に構想する、という方向に向かっている。いろいろな科目で保育内容について学んでいることを、表す場として、「実習」がある。

まず1年次前期終了時に幼稚園実習が間近であるということが、節目となっていた。教育実習を自覚することで、子どもへの働きかけ方や遊び、子どもの興味関心のあり方などについて、知ろうとする意欲になっていく。初めての教育実習として1年次9月に幼稚園実習(2週間)に行ったときに、様々な活動は保育内容が総合的になっていることを体験すると、1年前期での学修を思い出し、その学修をつなげていくことができるようになる。これは、1つの節目になっている。身近に現場のない(附属園のない)養成校としては、この体験は重要である。1年次の9月に幼稚園実習を終え、1年次後期の授業では、保育実践と関連づけながら、考えられるようになってきて、次の保育・教育実習に向けて学びを深めている。また、1年次2月の保育実習、2年次前期には責任実習も含む幼稚園実習があり、保育者としての自覚が芽生え、子ども理解や子ども主体の保育の在り方も考えられるようになってきている。そして、2年次終了では、卒業と同時に現場にでることが、期待や意欲をもった節目となっている。

ここから、学修者の実習を節目とした保育内容授業の構成が必要だということが考えられる。節目を活かしていけば、保育内容が総合的であるということ、知識としても実感としても理解することになるといえる。

一方、乳児から就学前までという子どもの育ちに沿った保育内容の理解については、深まる過程が読み取れなかった。このことから発達を軸にとらえる視点を学生に与えることが足りなかったと考える。領域という横のつながりを意識していた分、発達を時間軸でとらえる縦のつながりが、やや希薄であったと思われる。また、「乳児保育」での学修との連携が求められる。

### 3 複数領域と共有しやすい視点・教材

1年前期は、初めの期であることから、「保育内容(健康)指導法」「保育内容(言葉)指導法」の2科目で、本研究の対象養成課程の特色を活かした身体的活動を領域間の共有視点・教材として用いた。

「保育内容(健康)指導法」では、鬼ごっこやボールを用いた遊びなど子どもの身体的活動について全4コマの授業を行った。身体的活動(運動遊び)を通して、子どもは遊びや生活を通して学んでいること、発達に応じた遊びやルールがあること、またリスクとハザードなど安全管理や指導方法、環境設定などの理解が深まったことが分かる。また、「保育内容(言葉)指導法」では、継続的に言葉遊びを行っていたことに加え、1コマ内で鬼ごっこを行った。これらの活動が、遊びの総合性に気付くきっかけになっているので、同じ題材を他視点で取り扱うことでの工夫を継続する必要がある。

表16 「健康」「言葉」学生の振り返りコメント(一部抜粋)<sup>21)</sup>

(健康)

- ・ 子どもは主に遊びの中で、様々な経験をしていることが分かりました。子どもは成長するにつれて、身長や体重など外見も発達し、それと同時に、心の発達もしています。一番発達が大きいのは、幼児期で、健康以外にも、言葉などの発達も大きく影響してくると知りました。運動遊びでは、鬼ごっこ、ドッ

ジボールなどの遊びをやりました。その中で、年齢ごとにルールが違って、保育士や幼稚園教諭は、子どもが活動する中で、危険がないかどうか周りを見て、安全で楽しい環境づくりが重要になってくると思いました。リスクとハザードの意味も理解することができました。

(言葉)

- ・ だるまさんがころんだやねことねずみなど様々な遊びをして子どもの気持ちになってやれてよかったです。
- ・ 言葉を使った遊びや言葉遊びと体を使った(融合した遊び)を多く学んだ。

共有できる教材を使うことで、領域の総合性に気付くコメントがあがっている。

また、1年後期では、「保育内容(人間関係)指導法」、「保育内容(環境)指導法」での学修から、人間関係の形成に言葉が必要であると考え、領域「言葉」との関連を意識している。前期に学んだ科目(領域「健康」「言葉」と)の関連を意識している。

表17 「環境」「人間関係」学生の振り返りコメント(一部抜粋)<sup>22)</sup>

- ・ 子どもと子どもがつながり、自分の思いを自分の言葉で伝えられるよう、領域言葉、人間関係で学んだことを活かし、実習でもつなげていきたい。
- ・ 保育内容”人間関係”では前期に習った、「健康」や「言葉」などで学んだことも活かして、また、保護者と保育者の関わり方など、教育現場で役に立つことばかりで、実際に班で話し合ったり、楽しかった。
- ・ 5つの領域で子どもにとって重要なので保育者としていい支援をしていけるように頑張りたい

2年前期では、「保育内容(表現)指導法」での学修から、5領域全体の関連を意識している。他領域と関連付けて考えられるようになってきている。

表18 「表現」学生の振り返りコメント(一部抜粋)

- ・ 他の領域と関連づけながら、子どもは今日のようなことを学んでいるのかを考えて保育する。また、保育を改善していく姿勢を常に持つ。
- ・ 10の姿を理解し、たくさんの経験をして保育内容を重ねて、小学校教育へつなげられるようにしたい。

以上のことから、複数領域と共有しやすい視点、教材は、次のようになる。

表19 複数領域と共有しやすい教材

- 体を動かす遊び  
例、鬼ごっこ  
子どもの頃に遊んだ体験がある。体育大学生として、運動することへの抵抗感は少なく、取り組みやすい。
- 身近な自然を使った遊び  
例、どんぐり  
大学近辺で手に入るもの。安全性の高いもの。
- 指導案作成～模擬保育～振り返り  
作成の過程で、領域のねらい内容について考えたり、環境を具体的にしていくことで空間や時間なども含めていくと、より現場に近い発想が必要になる。模擬保育を行う際には、子どもの反応や臨機に対応することを体感し、それを振り返ることで循環性を学ぶことになる。

2年間の終わりに向かっていくと、学生が自分から領域を総合的に考えようとする姿勢もでてくるので、教材としてその時期にまさに現場で取り扱っているものを、学修できるようにすることが、望ましいと考える。

4 学生による5領域の振り返り

(1) 学修内容についての自己評価

表20 学修内容についての自己評価項目

1 各領域のねらい及び内容
1) 保育・幼児教育における幼稚園教育の基本、各領域のねらい及び内容並びに全体構造を理解している。
2) 各領域のねらい及び内容を踏まえ、幼児が経験し身に付けていく内容と指導上の留意点を理解している。
3) 保育・幼児教育における評価の考え方を理解している。
4) 領域ごとに幼児が経験し身に付けていく内容の関連性や小学校の教科等とのつながりを理解している。
2 保育内容の指導方法と保育の構想
1) 乳幼児の認識・思考、動き等を視野に入れた保育の構想の重要性を理解している。
2) 各領域の特性や幼児の体験との関連を考慮した情報機器及び教材の活用法を理解し、保育の構想に活用することができる。
3) 指導案の構成を理解し、具体的な保育を想定した指導案を作成することができる。
4) 模擬保育とその振り返りを通して、保育を改善する視点を身に付けている。
5) 各領域の特性に応じた保育実践の動向を知り、保育構想の向上に取り組むことができる。

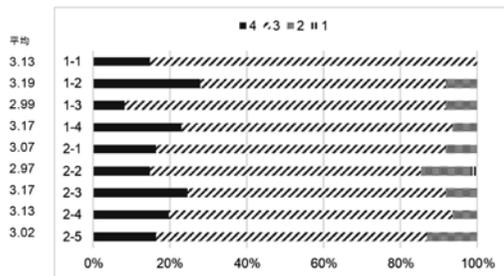


図8 学修内容についての自己評価

5領域を通して学修内容の授業の到達目標について、学生の自己評価は概ね達成した(9割)と捉え

ている。ただし、到達目標2-2「各領域の特性や幼児の体験との関連を考慮した情報機器及び教材の活用法を理解し、保育の構想に活用することができる」及び、2-5「領域の特性に応じた保育実践の動向を知り、保育構想の向上に取り組むことができる」については、若干9割を下回っている。この2項目については、保育現場で日々の実践の中で更に学んでいけるのではないかと考える。2年間の授業を通しての学びと、保育・教育実習の成果があったと考える結果である。

表21 どのような活動が総合的な活動かについてのコメント(一部抜粋)

<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 指導案を書いて、クラスみんなの前で活動をしたこと。(自己紹介、責任実習)</li> <li>・ 幼児期の終わりまでに育みたい10の姿を書き出して、どのような意味が込められているのか学んだこと。</li> <li>・ 指導案を書くことが、総括的な5領域の活動だと思います。すべてを含んで書くことが一番いい指導案になると思います。年齢によって指導案は違いますが、5領域を考えることは必要でした。</li> <li>・ 指導案を書き、それを実践、振り返りをする。子どもは日々の生活の中の活動で5領域を自然と行い、過ごしていると思う。</li> <li>・ ねらいや目的に準じて指導案を書いたこと。保育中のDVDをみて指導法の説明を聞かせて頂いたこと。</li> <li>・ 教育実習が2回に分けて行われたことが学びにつながった。</li> <li>・ 実際に指導案を書いて、みんなの前で発表したこと発表した活動です。</li> <li>・ 運動会、お遊戯会など行事に向かう活動。鬼ごっこ、しりとり。</li> <li>・ 紙コップやウレタン棒を使った活動。言葉遊び、鬼ごっこ、模擬保育。</li> <li>・ ドッジボールやしっぽとり、自然に触れる(どこに何があって、咲いていたとか)</li> <li>・ 遊びを通して5領域が関わっていた。</li> <li>・ 遊びが5領域全般(砂場など)</li> <li>・ ごっこ遊び、製作活動、食事、言葉遊び、鬼ごっこ。</li> <li>・ チャイルドビジョンを使った鬼ごっこ</li> <li>・ どんぐりを使った製作、学校探検</li> </ul>
--

総合的な活動として、「指導案を作成し、模擬保育を行う」ということが、多くあがっている。子どもがど

のような活動をするのか、ねらいを考え、ふさわしい活動を選んだり、展開を考えたりしていくという過程において、5領域を意識したということである。学生は計画作成を総合的な学びであるとしている。実習では、計画作成から実践、反省まで行っているので、計画作成は総合的な活動であることが理解されている。

また、鬼ごっこ、だるまさんがころんだ、学校探検、しりとり、パネルシアター、ごっこ遊び、ウレタン棒や紙コップを使った活動、どんぐりを使った制作など、指導法の授業で体験した活動があげられている。これは、自分なりにその活動が複数領域のねらいを含んだ総合的な活動であることを意識することや、その活動が楽しく体験できたことが影響している。特に、表現指導法で体験したことが多くあげられているのは、授業者が意図して教材を選択していることが反映されていること、2年生前期で実習の体験も増えてきて、子どもの活動の総合性が実感できていることが考えられる。

## (2) ポートフォリオについての振り返り

表22 ポートフォリオについての振り返り項目

<p>1 毎時授業とポートフォリオ</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 授業毎のシラバスに、その日の授業のねらいや到達目標、授業内容が明らかにされていて、主体的に学修に取り組めた。</li> <li>2) 毎回、授業終了時に振り返りシートを書くことで、授業での学びを振り返ることを通じて学修の到達度を確認し、取り組むべき課題を見つけることができた。</li> <li>3) 毎回、課題に取り組むことで、授業での学びを深めることができた。</li> </ol> <p>2 ポートフォリオの活用</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) ポートフォリオを通して、学びを振り返り、自己課題を見つけることができた。</li> <li>2) 実習等の保育現場で、ポートフォリオを生かすことができた。</li> <li>3) 今後、これらのポートフォリオを活用していこうと思う。</li> </ol>
---

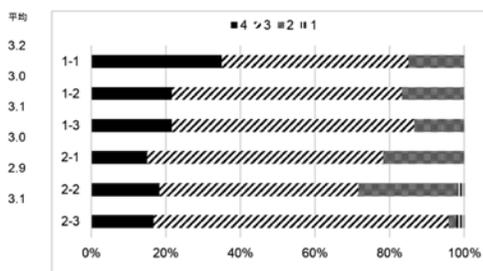


図9 ポートフォリオについての振り返り

学修ポートフォリオについての振り返りは、学生の自己評価は概ね達成した(8割)と捉えている。ただし、到達目標2-1「ポートフォリオを通して、学びを振り返り、自己課題を見つけることができた」、到達目標2-2「実習等の保育現場で、ポートフォリオを生かすことができた」については、8割を下回る結果である。到達目標2-3「今後、これらのポートフォリオを活用していこうと思う」と回答している学生のほぼ10割という結果であり、今後、保育現場でこの学修ポートフォリオを保育実践で活用していくことが期待される。

表23 ポートフォリオについての振り返り(一部抜粋)

<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 最初は面倒さがあったけど、作ることによって前回やったのも振り返ることができ、とても良かった。実習でもたくさん活かされた。</li> <li>・ 毎日の授業を書いてまとめておくことで、すぐに振り返ることができた。また、毎授業のつながりや、5領域のつながりも感じることもできた。</li> <li>・ ポートフォリオを作成することにより、今までの学びや授業で行ったことが、領域毎手元にあるので振り返りがしやすい。作成していて、15回目に近づくと自分自身の学びが深まっていることがポートフォリオを見て実感できた。</li> <li>・ 5領域は全て重なり合っ、つながっているということ。子どもが成長していく中で全て欠けてはいけないし、大切なことだということ。</li> <li>・ 作成している間にいつの間にか振り返りや確認をしていたので、頭に入っていた。</li> <li>・ 定期的にポートフォリオを振り返ることで指導案を書</li> </ul>
---

く際につながった。

- ・ 各領域にそれぞれ大切なことがある。複数の領域がまとまり、1つの活動が成り立っていること。
- ・ やっている時は大変だなと正直思ったけど、今見ると「こんなにやったんだ」と振り返ることが出来て、作って良かったなと思います。
- ・ 5領域で似ている部分が多かった。
- ・ 5領域似ていることが多くて分からなくなった。
- ・ 5領域とも同じようなことがあったと気づきました。
- ・ 自分の学びが目に見える形になることで、達成感を感じました。

5領域のポートフォリオを用いて振り返りを行うその過程で、5領域がつながっていること、子どもの育ちとつながっていることを理解している。これは、繰り返し振り返りを行ったことによるものだと考えられる。毎時シラバスがあることで、授業のねらいが明確になり、そのねらいを達成していることが自覚できているということである。それは、学生にとって、学んでいることへの達成感を味わうことにもなっていて、内容とともに、分量があることで充実感があり、インデックスをつけて整理しやすいことで、学んだことを取り出しやすい状態にしていたりすることになったのである。そこで、「いざという時」に活用する、という虎の巻のような印象を持った学生もいたと考える。「5領域が似ていること」がわかったという捉えとともに、「似ていることが多くてわからなくなった」というコメントがあった。これは、5領域の区別がつきにくいということだと考える。こういった理解は、あと一歩すすめば、その領域で特に強調していることと、複数領域で重複していることの両方の理解につながると思われる。5つの領域を俯瞰してみていくことや、自分なりにとらえ直す時間をつくるなどを考えていきたい。

### (3) ポートフォリオの活用

表24 ポートフォリオの活用についてのコメント(一部抜粋)

- ・ その日にあったことは、その日にまとめる、その日に反省する。
- ・ 楽しい活動、遊びのなかで成長していけるよう、ねらいをよく考えてから行う。
- ・ 今後幼稚園教諭になるため、5領域は深く関わって行くことだと思っているので、どのようなことを学んだか思い出していきたい時や初心に戻る時にポートフォリオを見て振り返ったりしたいと考えています。
- ・ 迷った時、悩んだ時に振り返っていききたいと思いません。
- ・ 困った時に読み返していきたい。
- ・ 自分の学びを振り返り、自己の課題を見つけられので、それらを今後の保育現場で生かしていきたい。
- ・ 困ったら見直す
- ・ 4月から新米先生になる自分…。困ったらプリント見ようかな～。
- ・ 遊びの種類を増やし、子どもの成長に関わる活動を取り入れたい。各領域の意義などについて振り返りをする際活用していきたい。
- ・ ポートフォリオの中の主活動の案などを活用していきたい。
- ・ 私の頑張りの活力にしたい。
- ・ 仕事がついつい時に、大学の頃頑張ったなと思出す時に見る。
- ・ 小学生の低学年や自分の子どもができたときなど、活用出来たらいいなあと思っています。
- ・ 小1や小2の担任をもった際に見れるように、取っておきたい
- ・ 迷ったら、参考にして何かのヒントにしたい
- ・ 学校で何を勉強したのか 振り返りができるように最低5年はとっておく
- ・ 何を頑張ったか振り返りたくなるときにみようと思う
- ・ 勉強したくなったら見返そうと思います。
- ・ 子どもができた時に、幼稚園を決める時に生かしたいと思えます。
- ・ 小学校体育においても、ただ単に活動をして終わりにするのではなく、成果や反省をまとめ、それをポートフォリオとして活用する形を取りたい

まず、「保育現場で活かす」という回答があがっている。更に、「小学校低学年においても活用しよう」という回答もあった。5領域が総合的であることや、そ

れを指導に反映させることについて、ポートフォリオにまとめた内容から取り出せる活動があるということである。ポートフォリオは活動のアイデアや指導計画を作ることに活かす内容が含まれたものになっているという自覚がある。

また、作成の過程での努力を可視化したものとして、「頑張った自分」の証として、初心に帰り、さらなる努力への励みになったと感じている回答も多い。いざという時に、使うという回答のように、精神的な支えになりそうである。現場にでなくても、子育てに使うという回答もあった。保存しておけば、活用するチャンスもある、ということである。

#### IV 結論

本研究では、学修ポートフォリオ及び学生自身による振り返りを基に、学生の学修状況等を分析し、ポートフォリオを活用した学修者の学びを可視化し、その効果を検証した。上記の条件下で得られた知見を次のとおり整理する。

学生は、保育内容を概ね理解「できた」と考えられる。5冊になったポートフォリオは、学びの足跡であり、努力の証である。手に取れる形、可視化できるものとして、プロセスを振り返りやすい結果として残ったのである。作成においては、形式を一貫することで、見やすく、取り扱いやすいものになった。

1年次履修の初めには、総合性に気づいたことを認めたり、共有を明確にしたりすることが必要である。さらに、実習での体験を重ねていることを活かすことが必要である。そして、授業での学修者同士の学びあいについては、気づきを共有することや、ロールプレイなどのワークなどで一緒に試行錯誤することができるよう企画していくことで、それをその授業の学びの振り返りとしてポートフォリオに残していくことが、学生自身の個人の学びを確実なものにしていくといえる。視覚化された成果(ポートフォリオ)を導入することは、学びのプロセスが学修者自身に自覚される。提出と返却を繰り返しながら、そのプロセスを担当者に共有されやすくなる。

次に、学生の学修のプロセスを、授業を担当する

二人で一緒に考えることは、保育内容をより深く考えることになった。改めて、多角的なものを見方をすること、2年間全体を見通していく継続性をもつことが重要であるとわかった。1つの授業を大切にすることであり、全体の中に位置づけられているということに自覚して、進行していくことがはっきりとした。これらは、協働で行っているからこそ、明確になったことである。2年間の節目を予測し、担当科目での教材を有機的に共有することで、保育内容の総合性の学修が確かなものになっていく。

学生自身の振り返りに関する評価を、授業の到達目標を踏まえて、教員の視点から評価したことで、今後に向けて学修成果を図れる結果となったと考える。ポートフォリオを導入することは、学びのプロセスが学修者自身に自覚され、そのプロセスを担当者として知ることができる。授業毎の到達目標と評価を積み重ねていき、複数の授業者が互いの進行状況を共有していくことで、1) 2年間の見通しを持ち一貫性があること、2) 修正しやすい柔軟な側面があること、の2点が特に重要なポイントとなることが示唆された。保育内容科目間の授業連携研究は極めて少なく、実際に保育内容の授業で複数の教員がオムニバス形式で行う場合はあっても、小川が「保育者養成課程のカリキュラムは、保育者養成のために構成されているにもかかわらず、各々の講義科目は各々まったく独立的であるかのように行われている<sup>23)</sup>」というように、科目間の連携が行われにくい現状を鑑みても重要である。

#### V 今後の課題

本研究において、保育内容指導法5科目の学修をポートフォリオにすることによって、学生が自身の学びを可視化して、深めていくことが明らかになった。特に、領域の総合性についての学びが得られた。これが可能だったのは、担当者が連携して2年間を見通したことによるものであり、カリキュラム及び担当者の変更、時間割の変更等があれば、同じように実施することが困難だと予想される。

研究の課題として、2年間での履修時期(配列)が

変わっても同様の成果が得られるか、また「領域に関する専門事項」の科目との連続性や「保育内容総論」及び「乳児保育」の授業とのつながりを踏まえたポートフォリオの有効性をどのように考えるか、という点がある。

授業プログラムの協働の課題としては、担当者間が同じ時間、空間を共有する授業を試みたいと考える。また、附属園のない保育者養成校にとっての教育実習は、学生自身で保育内容の学修をつなげる機会として重要であるので、幼稚園実習の2週間(2回)から4週間(1回)の実習期間の変更に対応する保育現場での直接体験の活用を図る検討が必要とされる。さらに、保育者養成課程の科目は演習授業も多く、それらの授業でどのようにICT等を駆使し、アクティブラーニングの視点に立った授業改善を行うかが重要である。以上の事項を踏まえ、今後も担当間で協働し、更に保育内容の授業の充実を図ってきたい。

#### 引用・参考文献

- 1) 佐藤学『教育の方法』左右社, 2010
- 2) 大学情報システム研究委員会「学修ポートフォリオシステムの 導入・活用等の参考指針」(公)私立大学情報教育協会, 2017
- 3) 中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて 用語集(答申)(2012)」文部科学省, [http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048\\_3.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf), p.38, 2017年9月9日.
- 4) 伊東弥香「学習者の「学び」の過程を可視化するための授業実践: 英語科教員養成の視点から」『表現学部紀要』(17), 11-24, 2016
- 5) 李熙卿「韓国語授業におけるポートフォリオの活用: 学習者参加型授業をめざして」『久留米大学外国語教育研究所紀要』(25), 19-43, 2018-03
- 6) 吉重美紀「英語の授業におけるポートフォリオの活用に向けて」『鹿屋大学学術研究紀要』(52),

2016

- 7) 土井晶子「「領域に関する専門事項」を含む「子どもと環境」に求められる授業プログラムの構築—学修者の主体的な学びにつながるポートフォリオの活用—」『共栄大学研究論集』(18), 2019
- 8) 同上
- 9) 村石理恵子・土井晶子「保育内容授業プログラムの協働1—ポートフォリオの導入—」日本保育学会ポスター発表, 2018
- 10)~14) 同上
- 15) 村石理恵子・土井晶子「保育内容授業プログラムの協働2—ポートフォリオを通じた授業の振り返り1/4—」日本保育学会ポスター発表, 2019
- 16)~21) 同上
- 22) 土井晶子・村石理恵子「保育内容授業プログラムの協働3—ポートフォリオを通じた授業の振り返り—」日本保育学会ポスター発表, 2020
- 23) 小川博久『保育者養成論』萌文書林, 2013

青木久子・松村和子『トポスの経営論理』萌文書林  
平山許江(2013)『領域研究の現在<環境>』萌文書林, 2019

保育教諭養成課程研究会・日本保育者養成教育学会「幼稚園教諭養成課程と保育士養成課程を併設する際の担当者及びシラバス作成について」, 2018

保育教諭養成課程研究会『幼稚園教諭養成課程をどう構成するか〜モデルカリキュラムに基づく提案〜』萌文書林, 2017

森司朗・青木久子『領域研究の現在<健康>』萌文書林, 2020

青木久子・小林紀子『領域研究の現在<言葉>』萌文書林, 2017

的場正美「授業研究と授業分析の課題・実践と理論へのその貢献」『東海学園大学教育研究紀要』(2), 2017

B.D.シャクリー・N.バーバー・R.アンブローズ・S.ハンズフォード/田中耕二 監訳『ポートフォリオをデザインする』ミネルヴァ書房, 2001

日本教育方法学会編『アクティブ・ラーニングの教育方法的検討』図書文化社, 2016